

第6章 1. 西ヨーロッパ世界の形成 c. ローマ=カトリック教会の成長

ローマ教会はローマ帝国時代、五大教会のひとつであったが、しだいにキリスト教会における[1 首位]権を主張、ローマ司教は[2 教皇]と自称し、自教会を[3 カトリック]教会とよぶようになった。しかし[4 西ローマ]帝国滅亡後は[5 ビザンツ]帝国とむすびついた[6 コンスタンティノープル]教会(東方教会)の方が優勢となったため、ローマ教会は[7 修道院]を拠点に聖像なども使用しながら[8 ゲルマン]人や[9 ケルト]人への布教をすすめた。

- ①[10 五大教会]制の成立→[11 ローマ]教会と[12 コンスタンティノープル]教会が有力に(西方教会) (東方教会)
*東方教会(コンスタンティノープル教会)…[13 ビザンツ]皇帝(帝国)の強い影響下におかれる
- ②ローマ教会=[14 首位]権を主張、司教を[15 教皇]、教会を[16 カトリック]教会と自称。
↓
(「普遍的」という意味)
[17 西ローマ]帝国の滅亡により、[18 ビザンツ]帝国への従属を余儀なくされる→不満
- ③教皇[19 グレゴリウス一世]…[20 ゲルマン]人や[21 ケルト]人などへの布教強化

= 22 西ローマ帝国に変わる保護者をゲルマン人の中に求める。

726年[23 ビザンツ]皇帝レオン3世が[24 聖像禁止]令をだすと、ローマ教会は強く反発、対立は激化した。こうした中でローマ教会は[25 ゲルマン]人、とくに[26 フランク]王国への結合を強化し自立の方向をすすめ、それにしたがって[27 ビザンツ]帝国と影響下にある[28 コンスタンティノープル]教会と対立はいつそうすすみ、1054年ついに東西教会が分離し、東方教会は[29 ギリシア正]教会とよばれるようになった。

カール大帝の「西ローマ帝国」

- ④ 726 [30 ビザンツ]皇帝レオン3世、[31 聖像禁止]令をだす。
→東ローマ帝国、[32 東方]教会との対立激化

[33 クローヴィスの改宗]以後、フランク王国との関係を深める

- ピピンによる[34 教皇領]の寄進、カールの戴冠([35 800]年)
- ⑤ 1054年東西教会が双方を破門(東西教会の[36 分裂]) →東方教会は[37 ギリシア正]教会とよばれる。

d. カール大帝

ピピン3世の子[38 カール]は[39 アヴァール]などを破る一方、他のゲルマン諸族との戦いをくりかえし、西ヨーロッパの主要部を支配した。これをうけ、[40 800]年[41 ローマ教皇]レオ3世は彼に[42 ローマ皇帝]の冠を与えた。このできごとは「[43 カールの戴冠]」とよばれ、この時をもって[44 西ヨーロッパ]世界が成立したとされる。

これにたいし東ヨーロッパ世界には[45 ビザンツ]帝国(東ローマ帝国)がながくのこり、とくに[46 ギリシア]文化の影響を濃厚に保存しつつ、[47 スラブ]民族へ伝え、[48 ギリシア正]教を中心とする西ヨーロッパとは違った文化圏を形成、双方が影響しつつ発展していく。

- ①カール大帝(ピピンの子)→サクソン族・[49 アヴァール]族(アジア系)をやぶり、西ヨーロッパの主要部支配
- ②文化の保護=[50 カロリング=ルネサンス]…アルクイン、アインハルトらを保護
- ③[51 800]年、教皇レオ3世より[52 ローマ皇帝]の冠をうける(「カールの戴冠」)

カールの戴冠の意義=西ヨーロッパ世界の成立

[53 ゲルマン]人であるカールが、[54 ローマ=カトリック]教会の長である教皇から、[55 ギリシア=ローマ]文化の象徴ともいえる[56 ローマ皇帝]の地位を得たことで、**ゲルマン・ローマ=カトリック・ギリシアローマ文化の3つの要素**が融合し、西ヨーロッパ世界が成立したとされる

e. 分裂するフランク王国

- ①カールの死後→フランク王国の分裂(843[57 ヴェルダン]条約 870[58 メルセン]条約)
- ②西フランク=[59 フランス]、[60 イタリア]、東フランク=[61 ドイツ]の三国に分裂

カールの死後、相続争いがおき、843年の[62 ヴェルダン]条約および870年の[63 メルセン]条約によりフランク王国は西フランク=フランス、イタリア、東フランク=ドイツの三国に分裂した。このときそれぞれの国の原型が形成されたとされる。

